

| | |
|------------------------------------|------------------|
| 公演名: フランソワ＝グザヴィエ・ロト指揮 レ・シエクル《春の祭典》 | 公演日: 2018年 6月12日 |
| 媒体名: 読売新聞(夕) | 掲載日: 2018年 6月28日 |
| 発行元: 読売新聞社 | 縮小率: % C P |

評 フランソワ＝グザヴィエ・ロト指揮 レ・シエクル



写真・大窪道治 提供・東京オペラシティ文化財団

今最もホットなコンビ、フランソワ＝グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクルが期待を遥かに上回る素晴らしい演奏を披露してくれた。この楽団は20世紀初頭の楽曲でも同時代の楽器を用いることで知られる。今回の来日で一度きりであった公演では、いずれもパリでバレエ音楽として書かれたか、使用された4篇の作品が取り上げられた。

歴史的な楽器の使用という点以上に、どの作品でも指揮者と楽員が一体となって、精密かつ躍動感に溢れたリズムを共有していたのにまず驚かされる。ドビュッシー

「春の祭典」 鋭いリズムの切れ

の「遊戯」やラヴェルの「ラ・ヴァルス」では、強弱の細やかな差異にも配慮が行き渡り、作品から溢れんばかりの生命力を引き出していた。通常の交響楽団に比して弦楽器の人数は少ないゆえに、前者の「牧神の午後への前奏曲」の冒頭主題を、和声付けや楽器法の変化で色彩を鮮やかに変化させる手法が室内楽的な音響で再現されたことも強い印象を残した。奏者の操作で音色に微妙な変化が起こる100年前の楽器の効果もあるだろう。

客席を興奮の坩堝としたのがストラヴィンスキーの「春の祭典」。やはり小規模な編成のため、リズムの切れが非常に鋭く、この作品が、人間の肉体を鼓舞するバレエ音楽であるという事実を改めて思い知らされた。指揮のロトは自身に漲る表現への意欲を楽団に伝えることを常に重視。正確無比にオケを操ることに終始するだけでは、高い完成度と熱情をここまで融合させることは不可能である。気が早い、今年のベスト・コンサートではないか。

(音楽評論家 安田和信)

12日、初台・東京オペラシティコンサートホール

Citation de l'article

"Although it is too early, it was the best concert of the year"